

## 1 はじめに

教授 中熊 秀喜

跳ねるから飛ぶへ

3月11日の未曾有の大震災の被害者にお見舞い申し上げ、一刻も早い回復を心から願う。災害を想定外として責任逃れに終始する専門家集団には啞然とする。政治と経済、また医療や福祉などの社会保障領域において、未だに信頼できる展望が描けず閉塞感が漂う。逆境こそ腕の見せ所と捉える頼もしいリーダーが待たれる。我々には座して待つのでなく自ら立ち上がり仲間と連携し、できることから片付けていく姿勢が問われる。本学は華々しさには欠けるが未来志向や有事対応など前向きである。一員としてあらゆる協力を惜しまない。

遅ればせながら平成24年度には現在の輸血・血液疾患治療部から新しく血液内科と輸血・細胞療法部（仮称）が分離独立し、前者は病院内科部門へ、後者は中央部門に配置され、また前者は医学部では血液内科学講座になる見込みである。並行して、血液内科の医局と研究室はお隣の神経内科の医局移転後にその場所を頂き、フル規格に拡大することが決定している。先触れとして輸血部には専任助教がすでに新しく配置されており、島貫先生が11月からその任に或る。

一方、県内の血液診療を支援すべく、和歌山労災病院に4月に二人目の専門医を配置できた。また紀南地域の血液診療の中心的役割を担う田村先生が当科にて研鑽中である。その間の地域診療の責任を新宮市立医療センターの蒸野先生が担い奮闘してくれている。血液診療医が不足する本県における当科の一つの使命として、若手医師の育成を急ぎ、支援重点地域を見定め県民の要望に適切に応えていく。そのためにも育成卒の学内助教配分へ大学側の理解と協力を求めつつ、少しでも和歌山に縁を持つレジデントの確保に努める。嬉しいことに日本血液学会認定血液専門医が新たに二人誕生した。教育面では医局員の情熱が学生に伝わり、好感度は高いとの評価を頂いており一層邁進したい。卒後教育の一貫として幅広く血液領域を学ぶ和歌山血液塾を主宰し、毎回30名ほどの熱心な参加者があり手応えを感じている。研究面では、栗本先生と島貫先生が大学院学位論文の完成を控え多忙な日々を過ごしている。院生として綿貫先生、細井先生、村田先生も続く。学会発表等の医局員の飛躍的活躍は誇りである。准教授（医局長兼任）の園木先生のリンパ腫の分子病態研究、病棟医長の畑中先生の臨床研究、外来医長の花岡先生の特発性造血障害の病態研究も大きな成果をあげており、外部資金も潤沢で今後の発展が楽しみである。栗山先生は2年目の後期研修を無事終えつつあり、これからは期待する。

常に我々の診療を支えてくれている看護師、検査技師、薬剤師、秘書、事務職員等に、心から感謝する。今年のおうさぎからバトンタッチする来年の干支とは飛ぶ辰、個人的にも年男として更なる研鑽をお約束したい。

## 2 教室現況

### (1) 教室員

医局	教授	中熊秀喜	
	准教授	園木孝志	
	助教	畑中一生	
	助教	花岡伸佳	
	助教	田村志宣	(4月1日～)
	助教	島貫栄弥	
	研究生	栗本美和	(～3月31日)
	学内助教	村田祥吾	(大学院生)
	学内助教	細井裕樹	(大学院生)
	学内助教	栗山幸大	(4月1日～)
	自治医大卒研修生	蒸野寿紀	
	大学院生	綿貫樹里	
	出向	なし	
	研修医	義間大也	(4月1日～6月30日)
		谷村美紀	(4月1日～6月30日)
		酒谷佳世	(4月1日～7月31日)
		木本万理	(7月1日～9月30日)
楠本恵子		(7月1日～9月30日)	
鈴木崇之		(9月1日～11月30日)	
橋本忠幸		(10月)	
手島 仁		(10月)	
池田悟子	(10月1日～12月31日)		
秘書	花井宏実		
	濱口尚子		
輸血部	主査	松浪美佐子	
	副主査	堀端容子	
	副主査	中島志保	
	医療技師	杉山絵美	
	医療技師	上田真弘	(4月1日～)

(2) 役割・責任体制（血液内科医局 5月～12月）

園木：副科長、教育主任（4年生臨床医学講座「オーガナイザー」、学生臨床実習など）、身体障害者福祉専門分科会審査部会委員、和歌山県エイズ対策推進協議会委員、原爆被爆健康管理手当等認定医、更正医療担当

畑中：病棟医長（入退院、当直表・日誌）、保険請求担当医（入院、DPC,レセプト）、リスクマネージャー、がん化学療法プロトコール委員会、和歌山県骨髄移植対策協議会委員、移植調整医師、救急・集中治療連絡委員、感染予防対策委員

花岡：外来医長、研究主任、保険請求担当医（外来）、栄養管理委員、オーダーリングシステム入力責任者、予約メンテナンス管理責任者

田村：人権同和研修委員、がん診療拠点病院担当医、電子カルテプロジェクトメンバー

秘書：慶弔・渉外、薬の説明会

(3) 人事異動

助教	転入	田村志宣	(4月1日～)
学内助教	転入	栗山幸大	(4月1日～)
医療技師	転入	上田真弘	(4月1日～)

### 3 臨床実習

輸血・血液疾患治療部（血液内科） 集合場所：入院病棟 5 階西 <u>血内カンファレンスルーム</u> （内線 2539） 総括の後、レポートを訂正し、血液内科医局の秘書机に一部提出すること。 （訂正したレポートを提出しない場合、実習を履修しなかったと判断する。） ☆コピーは病棟で行わず医局で行うこと☆								
日付	8	9	10:30	12	14	15	16	17
月		実習の 楽しみ方 (畑中助教)	症例学 習			症例学習 【テーマ決定】(主治医)		17:00- 19:30 チャート カンファレ ンス
火		8:30-10:00 入院患者廻診 (中熊教授 /園木准教授)	症例学習		症例学習		15:00-17:00 血球形態を学ぶ (畑中助教)	
水		外来・内科診察 (中熊教授)		症 例 学 習	14:00-15:00 輸血部実習 (松浪主査)		症例学習	
木	カンファ レンス (CC/ MGH)	症例学習			症例学習		16:00- HIV 感染症 を把える (園木准教授)	
金		症例学習			症例学習		16:00- レポート発表会/ レポート提出 (花岡/田村助教) ※レポートは全員分と 教官用を準備	

自ら考え、自ら行動しましょう。

教官から指摘を受けた箇所を訂正し、必ず医局に**本日中**に提出すること。

## 4 主な活動内容

### (1) 学術講演

#### 1) 国内講演会

中熊秀喜：「発作性夜間ヘモグロビン尿症（PNH）の分子病態と臨床」、日本PNH研究会・四国キックオフミーティング（Alexion 社主催）、2月19日、高松市

中熊秀喜：「貧血～見分け方と治療の動向」、山鹿市民医療センター医療研修講演会（山鹿市民医療センター）6月10日、山鹿市

中熊秀喜：「骨髄不全症候群の診断と治療」、第44回日本内科学会 近畿支部生涯教育講演会、6月19日、大阪国際会議場、大阪市

中熊秀喜：「発作性夜間ヘモグロビン尿症（PNH）の臨床と研究」、第2回東海PNH研究会（Alexion 社主催）、8月5日、名古屋市

花岡伸佳：「貧血は身近な病気？」、最新の医療カンファレンスー第6回「血液疾患の診断と治療」、11月10日、和歌山

中熊秀喜：「たかが貧血、されど貧血」、新別府病院講演会、11月25日、別府市

#### 2) 海外または国際講演会

該当なし

### (2) 学会および研究会

#### 1) 全国学会

細井裕樹、藤 重夫、中村文明、村田祥吾、畑中一生、中熊秀喜、鈴木律朗、熱田由子、神田善伸、玉置俊治：「同種造血幹細胞移植後の生着不全に対する再移植の多施設共同後方視的検討」、第33回日本造血幹細胞移植学会総会、3月9日10日、愛媛

中村文明、林野泰明、魚嶋伸彦、畑中一生、松本加代子、神前昌敏、藤井 浩、福原俊一、柴田弘俊：「さい帯血移植時の予後予測スコアシステム」、第33回日本造血幹細胞移植学会総会、3月9日10日、愛媛

村田祥吾、畑中一生、細井裕樹、花岡伸佳、栗本美和、島貫栄弥、園木孝志、玉置俊治、中熊秀喜：「非ホジキンリンパ腫に対する同種造血幹細胞移植の後方視的検討」、第33回日本造血幹細胞移植学会総会、3月9日10日、愛媛

畑中一生、鈴木律朗、熱田由子、日野雅之、豊嶋崇徳、小寺良尚、今村雅寛：「健常ドナーからの末梢造血幹細胞移植時の血管アクセスのためのデバイスに関する全国調査」、第33回日本造血幹細胞移植学会総会、3月9日10日、愛媛

田村志宣、田村 崇、藤本特三、畑中一生、園木孝志、大島孝一、中熊秀喜：「CD19 陽性であった Myeloid/NK precursor cell leukemia の一症例」、第51回日本リンパ網内系学会総会、7月1日2日、福岡

Sakata T, Tamura S, Ooshima K, Nagai K. : 「Granulocytic sarcoma with multiple skin and lung lesions.」第73回日本血液学会総会、10月15日、愛知

Ishiyama K, Nakamura F, Hatanaka K, Hosoi H, Fuji S, Uoshima N, Kamitsuji Y, Aoyama Y, Ichihara H, Kawakami M, Tamura S, Yoshii Y, Tamaki T. : 「Retrospective analysis for nephrotoxicity associated with concurrent usage of L-AMB and glycopeptide antibiotics in patients with hematological malignancy.」第73回日本血液学会総会、10月15日、愛知

Hiroki Hosoi, Shigeo Fuji, Fumiaki Nakamura, Shuichi Taniguchi, Maho Satoh, Shinichiro Mori, Hisashi Sakamaki, Keisei Kawa, Koji Kato, Rituro Suzuki, Yoshiko Atsuta, Toshiharu Tamaki, Yoshinobu Kanda: 「PBSC is preferable as a source of salvage transplant for graft failure after allogeneic HSCT.」第73回日本血液学会学術集会、10月14日～16日、愛知

Masaya Shimanuki, Takashi Sonoki, Juri Watanuki, Hiroki Hosoi, Shogo Murata, Koudai Kuriyama, Shinobu Tamura, Kazuo Hatanaka, Nobuyoshi Hanaoka, Hideki Nakakuma : 「Micro RNA 125b is overexpressed in a Ph positive acute lymphoblastic leukemia cell line.」第73回日本血液学会学術集会、10月14日～16日、愛知

Kenichi Ishiyama, Fumiaki Nakamura, Kazuo Hatanaka, Hiroki Hosoi, Shigeo Fuji, Nobuhiko Uoshima, Yuri Kamitsuji, Yasutaka Aoyama, Hiroyoshi Ichihara, Manabu Kawakami, Shinobu Tamura, Yumi Yoshii, Toshiharu Tamaki: 「Concomitant administration of liposomal amphotericin B and glycopeptide antibiotic is tolerable」第73回日本血液学会学術集会、10月14日～16日、愛知

細井裕樹、花岡伸佳、畑中一生、村田祥吾、島貫栄弥、栗本美和、栗山幸大、田村志宣、魚嶋伸彦、園木孝志、中熊秀喜：「セザリ一症候群に対する同種移植後 Graft-versus-lymphoma(GVL)の重要性」、第73回日本血液学会学術集会、10月14日～16日、愛知

## 2) 地方学会

佐々木貴浩、村田祥吾、畑中一生、細井裕樹、島貫栄弥、栗本美和、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「巨脾を伴う骨髓線維症に対して非血縁者間同種骨髓移植を施行し血球生着の遅延を期した症例」、第95回近畿血液学地方会、6月18日、兵庫

長崎讓慈、朝田裕貴、細井裕樹、花岡伸佳、畑中一生、村田祥吾、島貫栄弥、栗本美和、園木孝志、中熊秀喜：「免疫抑制療法後に急速に進行するEBV-LPDを発症した再生不良性貧血の症例」、第95回近畿血液学地方会、6月18日、兵庫

河村英恭、花岡伸佳、細井裕樹、村田祥吾、島貫栄弥、栗本美和、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「急性骨髓性白血病治療後に発生したdiffuse large B cell lymphoma(DLBCL)の一例」、第95回近畿血液学地方会、6月18日、兵庫

朝田裕貴、島貫栄弥、栗本美和、畑中一生、村田祥吾、細井裕樹、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「腸管型 $\alpha$ 重鎖病の一症例」、第95回近畿血液学地方会、6月18日、兵庫

細井裕樹、畑中一生、村田祥吾、島貫栄弥、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「移植後微小血管障害(TMA)による脳出血が軽快した一例」95回近畿血液学地方会、6月18日、兵庫

畑中一生：「魅力有る血液内科(若手医師へ)」95回近畿血液学地方会、6月18日、兵庫

野長瀬祥兼、田村志宣、池田督司、田村崇、線崎博哉、安岡弘直、中野好夫、藤本特三：「悪性リンパ腫と鑑別を要し、臍転移を呈したburned-out testicular tumorの1例」、第195回日本内科学会近畿地方会、9月10日、大阪市

義間大也、島貫栄弥、畑中一生、栗山幸大、細井裕樹、村田祥吾、田村志宣、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「成人急性リンパ性白血病におけるステロイド単独投与の有用性」、第195回近畿地方会、9月10日、大阪

谷村美紀、栗山幸大、細井裕樹、畑中一生、村田祥吾、島貫栄弥、田村志宣、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「腎静脈血栓症により凝固検査異常が持続したALLの1例」、第195回近畿地方会、9月10日、大阪

酒谷佳世、田村志宣、栗山幸大、細井裕樹、村田祥吾、島貫栄弥、畑中一生、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「クローン病の経過中に発病した再生不良性貧血の1例」、第195回近畿地方会、9月10日、大阪

島貫栄弥、園木孝志、村田祥吾、栗山幸大、細井裕樹、田村志宣、花岡伸佳、畑中一生、中熊秀喜：「インバース PCR 法による免疫グロブリンラムダ遺伝子 (IGλ) 転座点の単離」第 96 回近畿血液学地方会、11 月 12 日、大阪

木本万理、村田祥吾、栗山幸大、細井裕樹、島貫栄弥、田村志宣、花岡伸佳、畑中一生、園木孝志、松本雅則、藤村吉博、中熊秀喜：「Evans 症候群 (ITP+AIHA) との鑑別に苦慮した血栓性血小板減少性紫斑病 (TTP) の一例」第 96 回近畿血液学地方会、11 月 12 日、大阪

楠本恵子、栗山幸大、細井裕樹、村田祥吾、島貫栄弥、田村志宣、栗原稔男、花岡伸佳、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「血液悪性腫瘍治療に伴う発熱性好中球減少症における注射用塩酸バンコマイシン製剤後発品の安全性の臨床的検証」第 96 回近畿血液学地方会、11 月 12 日、大阪

酒谷佳世、栗山幸大、細井裕樹、村田祥吾、島貫栄弥、田村志宣、花岡伸佳、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「抗癌剤過剰投与に対し顆粒球輸注を施行し救命できた 2 症例」第 96 回近畿血液学地方会、11 月 12 日、大阪

鈴木崇之、細井裕樹、畑中一生、栗山幸大、村田祥吾、島貫栄弥、田村志宣、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「骨髓低形成を呈する急性骨髄性白血病 (AML) の寛解導入療法中に顆粒輸注が有用であった一例」第 196 回日本内科学会地方会、12 月 17 日、京都

### 3) その他 (研究会等)

中島志保、清水勇輝、光野絵美、堀端容子、松浪美佐子、畑中一生、中熊秀喜：「血縁者の末梢血幹細胞採取の現状」、第 9 回和歌山造血細胞療法研究会、アステラス製薬共催、2 月 5 日、和歌山市

河村英恭、村田祥吾、畑中一生、細井裕樹、島貫栄弥、栗本美和、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「巨脾を伴う骨髓線維症に対して非血縁者間同種骨髓移植を施行し血球生着の遅延を期した症例」、第 7 回 Practical Hematology、2 月 26 日、大阪

田村志宣、竜野真維、谷口文崇、栗原稔男、北村怜子、榎本哲也、寺本毅、覚野芳光、岡本幸春：「当院における放射線免疫療法 Zevalin® の臨床使用経験」、第 79 回和歌山医学総会、2011 年 7 月 10 日、和歌山市

酒谷佳世、河村英恭、花岡伸佳、島貫栄弥、栗山幸大、細井裕樹、村田祥吾、田村志宣、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「急性骨髄性白血病治療後に発生した diffuse large B cell lymphoma(DLBCL)の一例」、第 79 回和歌山医学会総会、7 月 10 日、和歌山



谷村美紀、長崎讓慈、細井裕樹、花岡伸佳、島貫榮弥、栗山幸大、村田祥吾、田村志宣、畑中一生、園木孝志、中熊秀喜：「免疫抑制療法後に急速に進行する EBV-LPD を発症した再生不良性貧血の症例」、第 79 回和歌山医学会総会、7 月 10 日、和歌山

義間大也、佐々木貴浩、村田祥吾、畑中一生、島貫榮弥、栗山幸大、細井裕樹、田村志宣、花岡伸佳、園木孝志、中熊秀喜：「巨脾を伴う骨髄線維症に対して非血縁者間同種骨髄移植を施行し血球生着の遅延を期した症例」、第 79 回和歌山医学会総会、7 月 10 日、和歌山

花岡伸佳、川口辰哉、堀川健太郎、米村雄士、村上良子、木下タロウ、中熊秀喜：「長期補体欠損における発作性夜間ヘモグロビン尿症 (PNH) 病態の解析」、第 1 回厚生労働省科学研究補助金 特発性造血障害に関する調査研究班合同会議総会、7 月 15 日、東京

園木孝志：「染色体転座点から単離した microRNA がはたす発ガン機構」、第 16 回神戸臨床腫瘍研究会、7 月 16 日、兵庫

細井裕樹、藤重夫、中村文明、畑中一生、谷口修一、佐藤真穂、森慎一郎、坂巻壽、河敬世、加藤剛二、鈴木律朗、熱田由子、玉置俊治、神田善伸、中熊秀喜：「生着不全時の再移植源としての同種末梢血幹細胞の有用性」：第 21 回南近畿血液病フォーラム、7 月 30 日、大阪

畑中一生：「これからの血液疾患の治療の方向」、骨髄移植推進財団 20 周年記念血液疾患治療と骨髄バンクの今、9 月 10 日、和歌山

園木孝志：「MicroRNA 発現異常による造血器腫瘍発生の機序」、東京大学医科学研究所共同研究拠点事業共同研究成果報告会、9 月 14 日、東京

綿貫樹里、園木孝志、谷本貴志、島本幸子、細井裕樹、村田祥吾、栗山幸大、島貫榮弥、田村志宣、畑中一生、花岡伸佳、寺田正樹、中熊秀喜：「造血器主要の治療に伴う輸血後鉄過剰症の MRI のよる画像評価」第 39 回和歌山悪性腫瘍研究会、12 月 17 日、和歌山

#### 4) 海外または国際学会

Sonoki T, Enomoto E, Kitaura J, Hatakeyama K, Watanuki J, Akasaka T, Kato N, Shimanuki M, Nishimura K, Takahashi M, Taniwaki M, Haferlach C, Siebert R, MJS Dyer, Aso N, Aburatani H, Nakakuma H, Kitamura T, :DEREGULATED EXPRESSION OF MICRORNA125B BY IGH TRANSCRIPTION ELEMENTS CAUSES ACUTE LYMPHOBLASTIC LEUKEMIA IN VIVO (Wakayama Medical University, Wakayama, Japan) 欧州血液学会議、London, UK 6/9-12, 2011

Kurimoto M, Matsuoka H, Hanaoka N, Uneda S, Sonoki T, Nakakuma H: Pretreatment of Low-Dose Decitabine to Leukemia Cells Markedly Enhances the Cytotoxicity of Gemtuzumab Ozogamicin. The 53<sup>rd</sup> ASH Annual Meeting (第 53 回米国血液学会), San Diego, CA, 12/10-13, 2011

### (3) 学術論文

#### 1) 和文原著

花岡伸佳、中熊秀喜：発作性夜間ヘモグロビン尿症の病態解析と治療の新展開。血液内科 62:469-475, 2011

高島純平、田村志宣、早川隆洋、那須英紀、藤本特三、「抗 GM-CSF 抗体測定が診断の決め手となった自己免疫性肺胞蛋白症の 1 例」、和歌山医学、62 号 3 巻、79-82、2011

田村崇、田村志宣、那須英紀、藤本特三、木下貴裕：ベバシズマブ投与後に難治性気胸を呈した肺腺癌の 1 例、日本呼吸器学会雑誌、49 号 9 巻、702-706、2011

竜野真維、田村志宣、谷口文崇、安岡弘直、那須英紀、藤本特三：原発性肺腺癌と鑑別を要した尿膜管癌肺転移の 1 例、日本呼吸器学会雑誌、49 号 11 巻、848-854、2011

#### 2) 英文原著

Kanakura Y, Ohyashiki K, Shichishima T, Okamoto S, Ando K, Ninomiya H, Kawaguchi T, Nakao, S, Nakakuma H, Nishimura J, Kinoshita T, Bedrosian CL, Valentine ME, Khursigara G, Ozawa K, Omine M: Safety and efficacy of the terminal complement inhibitor eculizumab in Japanese patients with paroxysmal nocturnal hemoglobinuria: the AEGIS clinical trial. Int J Hematol 93:36-46, 2011

Enomoto Y, Kitaura J, Hatakeyama K, Watanuki J, Akasaka T, Kato N, Shimanuki M, Nishimura K, Takahashi M, Taniwaki M, Haferlach C, Siebert R, MJS Dyer, Aso N, Aburatani H, Nakakuma H, Kitamura T, Sonoki T: E $\mu$ /miR-125b transgenic mice develop lethal B-cell malignancies. Leukemia 25:1849-1856, 2011

T, Sonoki :Molecular Cloning of Immunoglobulin Heavy Chain Gene Translocations by Long Distance Inverse PCR in “MOLECULAR CLONING SELECTED APPLICATIONS IN MEDICINE AND BIOLOGY ” ed by Brown GG INTECH 2011

#### 3) 和文総説

中熊秀喜：「日常診療でみられる血液異常と血液疾患：溶血性貧血」、診断と治療 99(7):1183-1187, 診断と治療社

花岡伸佳、中熊秀喜：「特集、分子病態からみた血液疾患診療の進歩：発作性夜間ヘモグロビン尿症の病態解析と治療の新展開」、血液内科 62(4):469-475, 2011、科学評論社

中熊秀喜：「分子標的治療薬による血液疾患診療の現状と展望（その2）、エクリズマブによるPNH治療の新展開」、臨床血液（日本血液学会誌）52(8):633-644, 2011

中熊秀喜：「特集、身近になる血液疾患の治療-専門医から実地医家へ、補体と血液疾患」、日本医師会雑誌、140(7):1448, 2011

#### 4) 英文総説

該当なし。

#### (4) 著書(単行本、シリーズもの含む)

中熊秀喜：「溶血に関する検査」、血液専門医テキスト、日本血液学会編集、p53-54、南江堂

中熊秀喜：「再生不良性貧血-発作性夜間ヘモグロビン尿症症候群」、症候群ハンドブック（編集：井村裕夫、福井次矢、辻 省次）、304-305、中山書店

中熊秀喜：「マルキアファーバ・ミケーリ症候群」、症候群ハンドブック（編集：井村裕夫、福井次矢、辻 省次）、316-317、中山書店

花岡伸佳、松浪美佐子、中熊秀喜：「輸血療法の実際」、白血病・リンパ腫・骨髄腫、今日の診断と治療（編著：木崎昌弘）、第4版、53-60、中外医学社

花岡伸佳、中熊秀喜：「発作性夜間ヘモグロビン尿症」、専門医のための薬物療法 Q and A、血液（編集：小松則夫、片山直之、富山佳昭）、改訂2版、51-63、中外医学社

#### (5) その他の印刷物(研究成果報告集、学会抄録集、寄稿文など)

該当なし。

#### (6) 受賞等

園木孝志：平成22年度和歌山県立医科大学次世代リーダー賞

花岡伸佳：平成22年度和歌山県立医科大学若手研究奨励賞

花岡伸佳：「NKG2D 介在性がん免疫の分析による造血幹細胞移植の抗腫瘍効果の事前予測システムの開発」、2011年度「医学系研究奨励」武田科学振興財団

## (7) 研究費、助成金

中熊秀喜：平成23年度厚生労働科学研究費補助金事業「特発性造血障害に関する調査研究班」  
(班長 黒川峰夫 東京大学教授)、溶血性貧血領域研究協力

花岡伸佳：平成23年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金)若手研究(B)(代表)、  
「特発性造血障害におけるNK G2D免疫の臨床的意義の確立」

## (8) 支援研究会など

第1回和歌山血液塾(中外主催、医局後援)：「多発性骨髄腫の診療指針」、畑 裕之(熊本大学講師)、1月21日、和医大キャンパス内(高度人材育成センター5階、大会議室)

第9回和歌山造血細胞療法研究会(共催：アステラス製薬)。特別講演：「造血幹細胞移植における看護」近藤咲子(慶応大学血液内科病棟師長)；「HLAはプロメテウスかエピメテウスか？—HLAタイプ&スクリーニングのすすめ」佐治博夫(HLA研究所所長)、2月5日、和歌山市

第2回和歌山血液塾(中外主催、医局後援)：「MDSの形態学、どのように親しみ、どのように診断するか」、通山 薫(川崎医大検査診断学教授)、2月18日、和医大キャンパス内(高度人材育成センター5階、大会議室)

第3回和歌山血液塾(中外主催、医局後援)：「悪性リンパ腫の病理分類～最近の話題～」、大島孝一(久留米大学医学部病理学教授)、3月11日、和医大キャンパス内(臨床講堂II)

第4回和歌山血液塾(中外主催、医局後援)：「造血幹細胞の分化と血液疾患」、片山直之(三重大学血液・腫瘍内科教授)、4月22日、和医大キャンパス内(高度人材育成センター5階、大会議室)

第5回和歌山血液塾(中外主催、医局後援)：「免疫性血小板減少症(ITP)の最近のトピック」、石田陽治(岩手医科大学血液・腫瘍内科教授)、5月13日、和医大キャンパス内(高度人材育成センター5階、大会議室)

和歌山県DIC治療セミナー(旭化成ファーマ主催)：「閉鎖循環系の守護神トロンボモジュリンの機能とその破綻の病態」、丸山征郎(鹿児島大学、特任教授)、6月17日、和医大キャンパス内(高度人材育成センター5階、大会議室)

第6回和歌山血液塾(ベネシス、田辺三菱製薬主催、医局後援)：「ATLの最新治療—造血幹細胞移植を中心に」、宇都宮 與(今村病院分院院長)、6月24日、和医大キャンパス内(臨床講堂II)

和歌山 Leukemia Seminar (Bristol-Myers Squibb社主催) : 「CML治療の今後の展望」、魚嶋伸彦 (松下記念病院血液科部長)、7月2日、ホテルグランヴィア、和歌山市

第7回和歌山血液塾 (大日本住友製薬主催) : 「補体欠損症の基礎と臨床」、堀内孝彦 (九州大学病態修復内科学、准教授)、7月22日、和医大キャンパス内 (高度人材育成センター5階、大会議室)

第8回和歌山血液塾 (ブリストルマイヤーズ社主催) : 「B型肝炎をめぐる最近の話題」、藤山重俊 (NTT西日本九州病院長)、9月9日、和医大キャンパス内 (臨床講堂II)

ノイトロジン 発売20周年記念講演会 in 和歌山 (中外製薬主催) : 「同種造血幹細胞移植の過去・現在・未来」、岡本真一郎 (慶応大学 血液内科教授) ; 「ノイトロジン20年の歴史」、浅野茂隆 (早稲田大学特任教授)、9月30日、ホテルアバローム紀の国

第1回紀州血液塾 (中外製薬共催) : 「造血器腫瘍の免疫療法」、安川正貴 (愛媛大学教授)、10月29日、和歌山東急イン、4階、竹の間

平成23年度大学院特別講義 (和歌山県立医科大学) : 「ヒトT細胞白血病ウイルスの病原性発現機構」、松岡雅雄 (京都大学ウイルス研究所教授)、11月11日、和歌山医大研究棟3階セミナー室

血液内科セミナー : 「成人T細胞白血病 (ATL) の治療戦略」、松岡雅雄 (京都大学ウイルス研究所教授)、11月11日、和歌山医大研究棟10階、血液内科医局

和歌山 Hematology Seminar 2011 (ノバルティス主催) : 「CMLおよびAMLの治療と白血病幹細胞との関係」、松岡 広 (神戸大学 腫瘍・血液内科准教授) ; 「鉄の臨床：過去・現在・未来」、澤田賢一 (秋田大学教授)、11月18日、ダイワロイネットホテル和歌山

第9回和歌山血液塾 (大日本住友製薬主催) : 「骨髄増殖性腫瘍の病態と分子標的療法」、下田和哉 (宮崎大学教授)、12月2日、和医大キャンパス内 (高度人材育成センター5階、大会議室)

## (9) 海外出張

園木孝志 : 第16回欧州血液学会議 (EHA)、6月9日~12日、London, UK

## 5 診療実績

(1)	外来	患者総 (のべ) 数	4,601 名
		内新患者数	239 名
(2)	入院	患者総 (のべ) 数 (一時退院後を含む)	266 名
	退院	患者総 (のべ) 数 (一時退院を含む)	271 名

入院患者疾病別分類 (入院のみ, 重複あり, 疑い症例を含む)

1)	白血病	101
	急性骨髄性 (単球性等)	
	M0	0
	M1	2
	M2	16
	M3	17
	M4	6
	M5	
	M5a	0
	M5b	0
	M6	5
	M7	3
	Mixes	0
	MDS→AML	3
	急性リンパ性(ALL)	49
	慢性リンパ性(CLL)	0
	慢性骨髄性白血病(CML)	3
	CMMoL	1
2)	骨髄異形成症候群 (MDS)	8
3)	リンパ性腫瘍	
	非ホジキンリンパ腫	101
	ホジキンリンパ腫	21
	その他	
	成人 T 細胞白血病／リンパ腫	6
	重鎖病	1
4)	形質細胞腫瘍	
	多発性骨髄腫	20

5)	血球減少症（造血不全含む）	
	再生不良性貧血	4
	汎血球減少症	0
	血小板減少症（ITP 等）	1
	血球貪食症候群	0
	その他の貧血（鉄欠乏性など）	0
6)	溶血疾患	
	自己免疫性	0
7)	骨髄増殖性疾患	1
8)	感染症	
	HIV 感染症（エイズなど）	2
9)	その他	
	造血幹細胞移植ドナー入院	15
	不明熱	1
	キャッスルマン病	1
(3)	造血幹細胞移植	
	1) 自家移植	27
	2) 血縁	6
	3) 非血縁	19
(4)	死亡	16
(5)	剖検（率）	8 (50%)

## 6 リーダーレポート

准教授 園木 孝志

### Post Traumatic Growth

今年は災害の年であった。3月の東北地方における大震災・津波・原発事故、9月の紀伊半島における水害は衝撃的で今も傷跡は深い。リアルタイムで報道される映像は、これが日本のものかと目を疑いたくなるものであった。東北や紀南に赴きたいと思ったが、自分に与えられた職務を果たしていくことが被災された方々の力になると信じ、いつもどおりの場所と時間で働いた。まわりまわって、被災地の方々の応援になっているものと願っている。今年当科に田村志宣先生、栗山幸大先生が加わっていただいた。いずれも和歌山に縁のある先生で心強く感じている。今年一年の活動を振り返ってみる。

(臨床) 毎週水曜日午前には海南市民病院で外来を開かせていただいた。悪性リンパ腫や骨髄腫の患者さんを海南市民病院でも診療し、血液疾患の地域医療の発展に貢献したいと考えている。当科における同種造血幹細胞移植例数が増加するにつれ、悪性リンパ腫患者やHIV感染者では外来でのマネージメントが重要になっている。いろいろな方々から助けていただき、その日その日を何とかこなしているというのが実情である。この場をかりて、海南市民病院のスタッフの皆様、当院の外来化学療法センターの皆様、5西病棟で大変な患者さんを親身に診ていただいている主治医や病棟スタッフの皆様に感謝申し上げます。

(研究) かつて私が担当した白血病患者さんにみつけた遺伝子異常がマウスでも白血病を起こすことを報告できた。診療で生じた疑問を研究で解決したいという、私の夢が一つかなえられたと思っている。この成果を6月のロンドンで発表したが、かつての留学先のボスと会ったり、ロンドン界隈を歩いたりできたのは楽しかった。次は研究の成果を診療に生かしたいと考えている。

(教育) 島貫君の博士号取得を最優先課題とした。3月末までには仕事を形にしてほしい。綿貫君は週に一回、マウスの解析やPCRをやってくれている。この秋からは細井君の指導を担当することになった。研究の視点を持った臨床家として大成してほしい。本年も多くの研修医が当科を回ってくれた。血液内科を背負って立つ人間が生まれてくることを心待ちにしている。

(最後に) 辛苦を糧に成長することを「外傷後成長 (Post Traumatic Growth: PTG)」というそうだ。月並みなことしか言えないが、私も日本や和歌山のPTGに少しでも力になりたいと思っている。新年が皆様にとってよい年であるよう祈っております。



## 誇るべき和歌山県立医大・血液内科

病棟医長・助教 畑中 一生

時が経つのも早いもので、私が赴任して2年半が過ぎました。今年度は、田村先生、栗山先生がメンバーに加わり、益々、活気づきました。細井先生、村田先生も、後進の指導を担当するようになり、一層の成長を感じました。研修医もほぼ安定して血液内科をローテーションしてくれるようになりました。それにより飲み会の回数も自然に増えて、非常に楽しい1年でした。

血液がんの完治を目指した治療である造血幹細胞移植の症例数も、2年連続で年間50件を超えて、国内の有数の移植施設となってきました。恐らく、学長が目指しているトップ10には入っていると思います。今では、和歌山県下で発症した患者さんのほとんどを県内で治療することが出来ていると想像します。研修医やポリクリの学生達が、移植治療などを通じて、血液内科や血液疾患に強い興味を抱いてくれることも喜びとなっています。厳しい治療であるからこそ、治療が完了して退院出来た時の感動は、患者さんやご家族のみならず、スタッフ一同も非常に大きく感じる事が出来ます。私も、18年間医師として挫けることなく、楽しく日々の診療が出来ているのも、この感動のお陰であると感謝しています。

次年度には、西川先生や蒸野先生をはじめとした新しいメンバーと一緒に仕事が出来そうです。病棟での診療以外にも、臨床研究や学会発表などでも盛り上がれば、益々、病棟の雰囲気や活力がアップすることと想像します。今年度は、2月の日本造血細胞移植学会では、登録演題の3題全てがワークショップの口演に採択されるなど、移植件数が増えるだけでなく、学術活動でも周囲からの認知度が更に増すことと期待しています。

私は、若い先生と楽しく好きな病棟での診療を行っているだけですが、和歌山県立医大の血液内科が患者さんからも信頼され、スタッフや学生が誇りを持てるチームになることに、少しでも貢献できていれば嬉しいです。

昨春の近畿血液学会地方会で、若手医師に対して、「魅力ある血液内科」というタイトルで講演をさせて頂きましたが、近畿地区全体でも若手が一緒になって、血液内科を盛り上げていけるようになることを夢見ています。

私の活動や診療が、学閥の垣根を越えて、皆が自由に集まれて、相談できて、研究を行える環境を作ることに繋がればと念じています。和歌山県は近畿の南端ですが、これからは、若い先生達は、様々な活動の中心的な役割を担うことが十分に可能であると信じています。

日々の仕事に没頭していますが、1年が経つのは本当に早いと感じます。

2011 年は、震災、台風、水害と大変な天変地異を経験し、自然の絶対的な力を強く感じた一年であった。と同時に、人の逞しさ、絆、温かさに畏敬の念を抱かされた特別な一年でもあった。

今年の外來の出来事としては、3月に異動した栗本美和先生に代わり4月から田村志宣先生に骨髓腫を中心としたリンパ性腫瘍を担当して頂いた。さらに5年目となった村田祥吾先生と細井裕樹先生にも4月から再来担当として加わってもらい、病院の要望が強かった血液内科の完全2診制に復帰できた。看護スタッフも定例の異動により田又看護師から松井副看護師長を中心とした体制に代わった。このような体制下で、新患者数は月30名程度と昨年より増加傾向にあり、外來総患者数は昨年から1割近く削減できた。提供する医療の質が向上し、徐々に社会のニーズと信頼が得られつつあると感じる。今後は、増加する造血幹細胞移植の支援など外來業務の充実のために、移植コーディネーターの獲得等を引き続き病院に提案して行きたい。

研究では、栗本先生と島貫栄弥先生が大学院を修了し、村田先生と細井先生と蒸野寿紀先生が新たに大学院に加わった。現在も、栗本先生と島貫先生は研究活動を継続しているため、大学院3年の綿貫樹里先生や我々を加え、今では研究スタッフは総勢9名になった。今年は研究活動費も十分に確保でき、来年度は、研究スペースも倍増する。環境としては明らかに充実してきた。これからは、この恵まれた環境の中で、一つでも多くの和歌山発のオリジナルサイエンスを発信して行かなければならない。「血液と言えど和歌山」と言われる日が来るように努力したい。

また、新たな取り組みとして、症例検討会や各種学会報告等も定例化できた。研修医の先生とともに上級の先生方も準備等で大変だったと思います。ご協力ありがとうございました。これからも、より良い医療の提供に活かされると信じて、症例検討会は定期的に行う予定です。2012年も引き続きよろしくお願い申し上げます。

元々、一般内科・呼吸器内科であった自分が、崩壊の危機に面した紀南地区の血液医療を支えるために、平成20年10月から半年間、国立がん研究センター血液内科に研修しに行ってから、まだ3年しか経っておりません。国立がん研究センター血液内科の半年間の研修で多くのことを学びましたが、平成21年4月から社会保険紀南病院での血液診療はまだまだ力不足であり、十二分に紀南地区を支えるものではありませんでした。特に同種移植の経験のない自分は、血液内科医としては不完全体であると思いつけておりました。思い通りの診療ができず、歯がゆい気持ちでいた中、畑中一生先生から熱烈なお誘いがあり、主に同種移植を勉強するために、平成23年4月からこちらに赴任して参りました。

こちらに赴任してから、血液内科医として集中して勉強ができ、スタッフの先生方からたくさん御指導して頂き、大変充実した毎日を送っております。それは同種移植に留まらず、一般の内科診療を含め、幅広い知識をここで得ることができております。まだまだ、自分はここで学ばないといけないものがたくさんあると常日頃感じております。ただ、やはり、紀南地区の血液医療は逼迫した状況であることは間違いなく、こちらに赴任してからも、社会保険紀南病院のスタッフの方々や日高より以南の患者様からは、一刻も早く戻って常勤医として血液診療をして欲しいとの要望が多かったです。これ以上、紀南地区にご迷惑かけるわけにもいかず、たった1年しか経っていませんが、再び社会保険紀南病院へ戻ることを決心致しました。紀南地区の血液医療を支えることができるかは本当に自信ありませんが、今誰かがアクションを起こさなければ、医療崩壊の犠牲者がもっとたくさんできてしまうとヒシヒシと感じております。

もうひとつ、こちらに赴任して思ったことがありました。やはり仲間がたくさんいる方がいいと思いました。複数の血液内科医が同じことを議論し、治療方針を決めていくほど心強いことはないです（紀南時代はいつも一人で心細かったです）。そして、各々が助け合いながら、最後まであきらめず、困難を乗り越えていく方程式が、5西病棟で目の当たりにする場面が多かったです。このような完成されたチームは、本当に羨ましいと感じました。今回、私一人で紀南地区へ再び戻ることになりますが、いずれ同じ考えを持った仲間を増やし、素晴らしいチームづくりができればと思っております。チームドラゴンみたいに（笑）。その日を夢みながら、今しばらく鼓舞奮闘していきたいと思えます。頭脳はともかく、体力にはまだ少し自信がありますので、40歳までは頑張れそうです。

スタッフの皆さん、田辺にたまに飲みに来てください。お魚が美味しい飲み屋さんをいろいろ知っていますので、一緒に参りましょう。そして、その紀南地区の環境を少しでも気に入って頂ければ、一緒に働くことも考えて頂ければ幸いです。皆さん、お待ちしております（笑）。それでは最後になりましたが、諸先生方にはこれからも御指導御鞭撻して頂くことが多々あるかと思えます。そのときは何卒よろしくお願い致します。

## 血液内科への招待

輸血部助教 島貫 栄弥

あっ

という間に8年という月日が経ちました。不肖 私が先生と初めてお会いしたのは何の目標もない4年生の初夏でした。始まったばかりの臨床講義に初めから欠席している不逞な輩がいるから出席するようにとのお言葉を頂戴し教室に転がり込んだ所、優しいお言葉で

講義が聞き易いようにこれから血液内科の講義は一番前で聴講しよう

不肖 私はそれから中熊先生を間近で拝見するようになりました。その後 和歌山県立医科大学教授にご栄転されるとの最終講義にて 不肖 6年生の私がじゃんけんで負けて中熊先生へ花束を贈呈するお役を頂いたのも自然な成り行きでしたが、最終講義の中熊先生は

和歌山に是非来てくださいね 待っています

とおっしゃったお言葉には誰もが

まさか自分は行かないだろうなあ と思っていた様に感じられました。

しかし、不肖研修医 私が出身大学を飛び出し、研修義務化という時代の波に飲まれる寸前に中熊先生に再びお会いしお誘いを頂ける事になろうとは、想像し得ない事でした。運命とはそういうものなのかもしれません。じゃんけんで負けてから8年。和歌山県立医科大学血液内科の門を叩いて早や5年。不肖 私は多くの方方のご指導で医師を続けてこられたものと思っております。大学院生として園木先生にご指導頂き臨床と共に医学の研究において、緻密な原因の追究と反省を日々継続し努力と忍耐が必要であることを、医師としても研究するものとしても教えを頂きました。大学院の初めは小島先生にご指導頂きました。月山先生には緩和ケアの神髄を垣間見させて勉強させて頂きました。松岡先生や花岡先生には研究や臨床もですが様々な問題解決の方法や考え方を学びました。畑中先生には同種移植という大きな医療で多くの事を教えて頂きました。田村先生とは研修病院が同じ系列病院でしたので共通の話題で二人だけで盛り上がり楽しく仕事をさせて頂きました。細井先生や村田先生には病棟業務で沢山助けて頂いて先輩らしいことは何一つ出来ませんでした。栗山先生は和歌山県の医療を背負う血液内科の仲間、情熱と希望に満ちた若い先生です。研修に回ってこられた研修医先生各位にも沢山助けて頂いて感謝しております。前の秘書の大橋さんや東さん、花井さんや濱口さんにも本当にお世話になりました。輸血部の松浪主任さん、薬剤部の上田先生や斉藤先生や、検査部中村さんには多くの問題を解決して下さい本当に感謝しております。病棟では、岡本看護師長、小谷看護師長、塩路看護師長や外来の松井主任さんには温かくご支援を頂き、また多くの事を教えて頂き感謝しております。血液内科へお誘い頂いたお蔭で多くの素晴らしい出会いがありました。

(心や直観はすでに あなたが本当になりたいものを知っている

スティーブ ジョブス)

信じてやってきたことに間違いはなかったと思います。皆様に感謝の気持ちで一杯です。最後になりますが皆様のご健康とご多幸をお祈り申し上げてご挨拶とさせて頂きます。

3月に起こった東日本大震災。阪神・淡路大震災の時とは異なり、私たち臨床検査技師は被災地に赴くことはありませんでした。しかし、試薬メーカーの倉庫が被災したり、物流が止まってしまったりと、日常業務にも少なからず影響があり、通常の検査業務を滞りなく進めていくことの難しさを実感しました。

そして、1年を振り返ってみると、輸血検査については、制限をかけた時期があったにもかかわらず増加傾向にあります。特に輸血用血液製剤の購入金額は、11月までの集計で、すでに4億円（昨年1年間で約4億円）を超えており、お金を支払う経理課さんからは「前年同月と比べてこんなに増えているのはどうしてですか？」と何度も問い合わせがありました。実際、購入金額が前年同月より増えている月が7回（こんな比べ方が正しいのかわかりませんが）、そのうち増加金額1,000万以上の月が、2回ありました。廃棄金額は、前年を下回りそうなので、決して血液製剤を無駄にしているわけではないのですが、支出が増えると正当な理由を述べないといけないみたいです。ただし、輸血実績の増加が病院の収入となるには、システム的な改善がまだまだ必要です。一方、移植関連業務の件数は、自家末梢血幹細胞採取：29件、同種末梢血幹細胞採取：7件、骨髄濃縮処理：4件、顆粒球採取：7件、ハプロ移植時の血小板採取：1件でした。臨床工学技士の皆さんとの協力体制も順調です。これからも、みんなで協力して輸血部の業務を進めていきますので、よろしくお願いします。

最後になりましたが、人事異動で4月から新しく輸血部の一員になった上田君に自己紹介で、今年のリーダーレポートを終わります。

はじめまして。ご紹介いただきました上田真弘です。出身は大阪の堺で、高校まで大阪にいましたが、大学で神戸に行き、ご縁があって和歌山に来ました。大学時代にクラブ(バドミントン)の練習試合で和医大にお邪魔したことがあったのですが、そのころと比べて和医大周辺の変化に驚きました。

1年半ほど堺から通勤していましたが、通勤時間に耐えかねて、昨年和歌山に引っ越してきました和歌山県民の1人となりました。

和医大に来て3年目で、2年間病理検査に携わってから、輸血部に配属となりました。配属されてから早8ヶ月が経ち、ルーチンの基本は慣れてきましたが、まだイレギュラーな事が起こると、あたふたしてしまいます。その都度、松浪さん筆頭に他の輸血部職員の皆さまに助言いただきながら、職務にあたっております。まだまだ何かとご迷惑をおかけすることが多々あると思いますが、日々精進してまいりますので、これからもよろしくお願いします。

これからも、安全な輸血、安全な採取を目指し、みんなで協力していきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

## 「人と人との絆」

5階西病棟 看護師長 塩路 有理

巷ではジングルベルの音が聞こえています。平成23年ももうすぐ終わります。この1年を振り返ってみたとき、人と人との絆の大切さをこんなにも考えさせられた年はありませんでした。

今年3月に起きた東日本大震災をはじめとして、和歌山でも紀南地域は大水害に見舞われました。津波や水害で一瞬にして尊い命が、いとも簡単に奪われる事実を目の当たりにした時、私たちはやはり「人と人との絆」を考えずには居られませんでした。

そして、どんなに苦難に満ちた状況に置かれても、相手のことを思いやれることこそが人間の素晴らしさであると改めて感じさせられました。下の写真のタオル帽子は、その象徴でもあります。毎年、クリスマスの時期になると、「岩手ホスピスの会」と「いきいき和歌山がんサポート」からたくさんのタオル帽子が送られてきます。そして、それが、化学療法の副作用で大切な髪が抜けてしまった患者さんの頭を包んでくれると同時に、悲しみや苦しみの感情をほっこりと包みこんでくれる効果もあり、大変喜ばれています。

特に、岩手県の「岩手ホスピスの会」はいち早く夏にも一度タオル帽子を送っていただきました。まだまだ被害も大きく、自分たちの地域の暮らしを立て直すだけで大変なのに、各地のがん拠点病院にタオル帽子を送られたと聞いて、本当に頭の下がる思いがしました。岩手県は遠く離れていて、本当の苦しみや苦難ははかり知れませんが、タオル帽子を通して、岩手県の人たちとの「絆」を感じることができました。そして、岩手の人たちに負けないように、入院患者さんの看護に力を注がないといけないと決意を新たにしました。



【タオル帽子】



【病棟のクリスマスツリー】



平成24年は辰年です。  
龍が天を駆け巡るとく、医療チームのメンバーが生き生きと自由に活躍できることを願います。

## 7 寄稿文

当院より ご報告いたします

独立行政法人労働者健康福祉機構

和歌山ろうさい病院 血液内科 阪口 臨

2011年は、日本の各地が未曾有の天変地異に見舞われ、和歌山もその例外ではなかったことを記憶に留めておきたいと強く思います。

特に、3月の東日本大震災後、当機構本部の指揮により、全国の労災病院が力を合わせて被災地の方々の健康を守るべく、数日単位での巡回診療を徹底させてきました。私自身は直接協力できませんでしたが、実際の診療に携わった方の体験を見聞きし、日々の業務を見つめ直すいい機会を得ることができました。

それは、被災後、日が経つに連れて、現地での診療状況が変化していったということです。当初は、水害や寒さなどによる低体温症や、食料不足などによる脱水症がほとんどだったようですが、徐々に、薬剤不足による持病の悪化を伴った体調不良や、津波が引いた後の砂埃や粉塵による呼吸器症状、さらに、精神的ショックや不安による不眠などが主になっていったようでした。

これを、当科の診療に照らし合わせると、血液疾患治療においても、患者さんの容体は日々刻々と変化していくことが常に予想されます。その変化に、迅速かつ柔軟に対処できることが非常に重要であり、治療成績を向上させるための生命線といっても過言ではない、と再認識した次第です。

また、当科にとっては、ありがたい“激動”の一年でした。2011年4月に、貴医局より、栗本美和先生を迎えることができ、すでに当科の即戦力として活躍してくれています。貴医局においては、中熊先生をはじめ諸先生方により栗本先生を長年ご指導くださったこと、スタッフの数が潤っているとは言えない状況の中、栗本先生を送り出していただいたことに、深く感謝しております。ここに御礼申し上げます。さらに、当院内でのコメディカルスタッフを対象としたゼミを月1回企画し、開催することができました。これは、栗本先生の新加入がなければ実現しなかったことでした。

今後は、不測の事態を含めたさまざまな変化に対し、幅広く的確に対応できるような、より発展した厚みのある診療を続けていきたいと思っておりますので、引き続きご指導ご鞭撻の程を何卒よろしくお願いいたします。